石見銀山遺跡・石見銀山世界遺産センター

施設管理者　　：島根県大田市
施設所在地　　：島根県大田市大森町
調査見学時期　　：平成 30 年 11 月 30 日（金）
施設概要

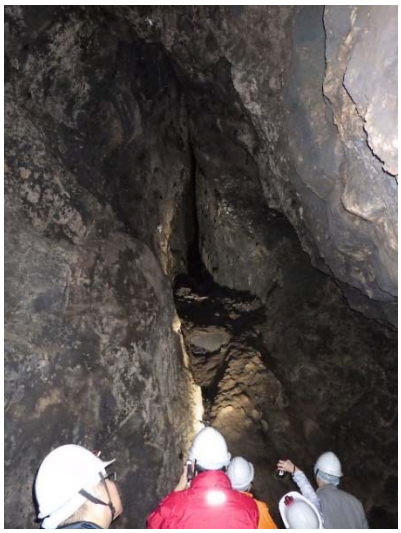
石見銀山は、16 世紀前半（戦国時代）に本格的な採掘が始まってから大正末期まで、約 400 年にわたり銀を産出し続けた日本最大級の銀山でした。石見銀山遺跡は、周辺の遺構、集落および街道などの文化的景観も含めて、2007 年に世界遺産に登録されています。

現在、石見銀山遺跡では龍源寺間歩（まぶ；坑道のこと）と大久保間歩の 2 つの坑道が一般に公開されています。前者は全長約 270m の通り抜けコースとなっており、入場料を払えば自由に見学できます。後者は、全行程 2 時間半程度のガイド付き徒歩ツアーに参加することで見学可能です（平成 31 年 4 月以降は、ルートが一部省略される予定）。

大久保間歩は、江戸時代の初代銀山奉行、大久保長安にちなむもので、石見銀山の中でも最大の規模を誇っています。坑道内は大変広く、鉱脈にぶつかったところでは、ひ押し坑（鉱脈に沿って掘り進んだ穴、手掘り）が横へ上へ下へ延々と伸びています。暗い坑内を螺灯（らとう）片手に採掘に挑んだ先人の執念がひしひしと感じられます。螺灯とはサザエの殻に油を入れて灯したランプのことで、大田市の公式マスコット「らとちゃん」のモチーフになっています。

石見銀山世界遺産センターは、石見銀山遺跡を含む世界遺産のガイダンス機能を担う施設で、石見銀山の世界史的な意義、同銀山の歴史、採掘から精錬までの技術、生活様式などについて、豊富な資料と共に学ぶことができます。

大久保間歩の坑口


坑道内部の様子